

感情コントロールが上達した児童の変容と支援技法について

—— 情緒障害等通級指導教室への質問紙調査の結果から ——

測上 真裕美*・林 安紀子**・堂山 亞希***・町田 唯香*・李 受眞****

(2019年11月25日受理)

FUCHIGAMI, M., HAYASHI, A., DOYAMA, A., MACHIDA, Y. and LEE, S.; Development of Students with Improved Emotional Control, and Support Methods: *Results of a Questionnaire Administered in Resource Rooms*. ISSN 1349-9580

A questionnaire survey was conducted with resource room teachers of children with emotional disorders in elementary schools to identify support methods for children with difficulties in controlling their emotions, factors that improved emotional control, and changes in children in regular classes. The questionnaire asked teachers to focus on one student that had improved his or her emotional control during the past few months to one year compared to before that period. We obtained 196 valid responses to the survey. Results indicated that social skills training, counseling, and practice in noticing own feelings were conducted often in resource rooms. Also, changes in homeroom teachers and mothers at home contributed to emotional control. Moreover, children were able to adapt and enjoy school life by improving their emotional control. These findings indicate that environmental adjustment and the positive involvement of adults with children influence children's emotional control. Furthermore, approaches that explicitly teach about the inner understanding of children and appropriate emotional expression were effective.

KEY WORDS : Emotional Control, Development Disability, Elementary School Students

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

** Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University

*** Faculty of Human Sciences, Mejiro University

**** The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

1. 問題と目的

文部科学省の調査(2012)¹⁾により、小・中学校の通常学級において学習面又は行動面において著しい困難を抱える児童が6.5%在籍することが示された。それに伴い、平成18年度から注意欠陥多動性障害(ADHD)及び学習障害(LD)が通級指導の対象として学校教育法施行規則に規定され、特別な支援を必要としている児童生

徒への支援体制が少しずつ整備されている。実際、通級による指導実施状況調査(文部科学省, 2018)²⁾では、通級する児童生徒の増加が示されており、特に情緒障害や自閉症スペクトラム障害(ASD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)の児童生徒の増加が著しくなっている。

先行研究では、通常学級において特別な支援が必要とされる児童の多くは、学習やコミュニケーションの様

* 東京学芸大学大学院教育学研究科

** 東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター

*** 目白大学人間学部

**** 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

式において、他の児童と異なる特徴が見られること(司城, 2012)³⁾や、発達障害のある児童が認知や社会性発達にアンバランスさを示し、それが感情や情緒の不安定さ、コミュニケーションや対人行動での困難さに繋がることが多いこと(武蔵・西本, 2013)⁴⁾が指摘されている。また、菅野・橋本(2016)⁵⁾は、発達障害の児童は複数の特性がある状態に「感情のコントロールの困難さ」が加わることによって行動・情緒的な問題や学校不適応に発展する可能性を示している。

発達障害を対象とする研究のなかで、感情コントロールの困難さに伴った問題行動を示す児童に対する研究がさまざまな視点から取り上げられ、数多く扱われてきた(都築・長田, 2016; 菅野・橋本, 2015)^{6) 7)}。しかし、支援を行ったことによって感情コントロールや表現が上手になった児童に焦点をあて、その変容や効果的な指導などを報告するものは少なくなっている。

本研究は、感情コントロール・表現が上手になった児童について取り上げ、その児童に対して行った支援や感情コントロールを上手にした要因、効果的な指導方法、それによって生じた児童の姿(変化)などを通級指導教室への調査から明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2. 1 調査対象と調査方法

東京都・埼玉県・神奈川県・千葉県の公立小学校446校の情緒障害等通級指導教室及び特別支援教室の教員を対象とした。郵送にて質問紙を配布し、記入後返送してもらった。調査期間は2017年7月から9月であった。197校から返送があり(回収率44.2%)、調査項目に回答していない回答者を除いた196名(回収率43.9%)を分析対象とした。

2. 2 調査内容

回答者の属性及び経験等、担当している児童の中でここ数カ月～1年の間に以前に比べて感情のコントロールが上手になった児童1名(以下、対象児)を任意に抽出してもらい、以下の項目を尋ねた。なお、感情のコントロールが上手になった児童について、「感情の起伏による対人トラブルや激しく泣いたり怒ったりする頻度が減少した、クールダウン後の切り替えが早くなった、等」と例示を行った。

(1) 対象児のプロフィール

性別、学年、障害の診断について、服薬の有無について、選択式で回答を求めた。なお、障害名の詳細は自由記述で回答を求めた。

(2) 対象児に行った支援技法について

通級指導教室において対象児に行った具体的な支援技法について、選択式で回答を求めた。なお、解答は複数回答可とした。

(3) 対象児の感情コントロールを上手にしたと考えられる要因について

対象児の感情コントロールを上手にしたと考えられる通級指導教室での支援技法以外の学校生活や家庭生活などの要因について、自由記述で回答を求めた。

(4) 対象児の通常学級での変化について

対象児の感情コントロールが上手になったことによって生じた通常学級での変化について、自由記述で回答を求めた。

2. 3 倫理的配慮

協力者(協力校)並びに対象児の保護者に対し、調査の趣旨について書面にて説明を行った。また、回答は自由意思であること、調査への協力を拒否しても不利益は生じないこと、得られた情報は研究の目的以外で使用しないこと、得られたデータは匿名化されて使用されるため個人情報保護されることを事前に伝え、調査への協力と結果の発表、掲載において同意を得た。なお、本調査は東京学芸大学研究倫理委員会承認[152]のもと行った。

3. 結果

3. 1 回答者

回答者の教員勤務年数の平均は19.0年(SD:11.0)であった。また、通級指導教室における勤務年数は6.2年(SD:5.2)であった。

3. 2 対象児のプロフィール

抽出された感情のコントロールが上手になった児童は、全196名であった。プロフィールを以下に示す。

(1) 性別

男児176名(89.8%)、女児20名(10.2%)であった。

(2) 学年

1年生4名(2.0%)、2年生26名(13.3%)、3年生39名(19.9%)、4年生47名(24.0%)、5年生46名(23.5%)、6年生25名(12.8%)、未記入9名(4.6%)であった。

(3) 障害の診断について

診断無し74名(37.8%)、診断あり119名(60.7%)、未記入3名(1.5%)であった。診断ありの対象児の中では、自閉症スペクトラム障害(ASD)50名(42.0%)、注意欠如多動性障害(ADHD)43名(36.1%)、ASDとADHD

表1 対象児に行った支援技法 (N=196) (複数回答)

項目	件数 (%)	項目	件数 (%)
ソーシャルスキルトレーニング	147 (75.0)	他者の気持ちを理解する練習	72 (36.7)
カウンセリング	125 (63.8)	ロールプレイング	69 (35.2)
自分の感情に気づく練習	118 (60.2)	遊戯療法	64 (32.7)
感情をコントロールする練習	99 (50.5)	アサーショントレーニング	56 (28.6)

表2 感情コントロールが上手になった要因 (N=174)

カテゴリ	サブカテゴリ	具体例	件数 (%)
学校 139 (79.9)	担任 (関わり含めて) の変化	・学年が上がり担任の先生が替わった ・明確なルールの提示 ・気持ちの受け止め ・良いところをほめてくれる 等	83 (47.7)
	担任以外の変化	・校内での共通理解 等	14 (8.0)
	クラス (周囲児) の変化	・周囲が刺激のある言葉を言わなくなった ・クラス替え ・クラスの子の理解 等	32 (18.4)
	学習環境の整備	・座席の調整 ・クールダウンの場の提供 ・教室を涼しくした 等	10 (5.7)
家庭 71 (40.8)	母の理解	・母親の受け入れと理解が進んだ 等	13 (7.5)
	母の対応の変化	・強く叱責せずに話を聞いてくれるようになった ・見通しの持てる生活に変えた 等	39 (22.4)
	母の安定	・保護者の心にゆとりができた 等	8 (4.6)
	父の対応の変化	・父親の養育態度が変容した 等	5 (2.9)
	家庭環境の変化	・親の再婚 ・習い事を減らした 等	6 (3.4)
学校と家庭の連携 27 (15.5)		・通級, 担任, 保護者による一貫した対応 ・学校と家庭の共通理解 等	27 (15.5)
児童自身の変化 23 (13.2)	自己理解と自己肯定感の向上	・得意なことを認めてもらって自信がついた ・自己理解が進んだ 等	8 (4.6)
	自己意識・コントロールの向上	・進級して意識が変わった ・自分でクールダウンできるようになった 等	15 (8.6)
その他 19 (10.9)	医療との連携	・服薬を始めた 等	11 (6.3)
	通級指導教室等の活用	・通級で取り出しの指導ができた ・諸機関と連携をとった 等	8 (4.6)
なし・わからない 5 (2.9)			5 (2.9)

の双方の診断あり9名(7.6%), その他5名(4.2%), 未回答12名(10.1%)であった。

(4) 服薬の有無

服薬ありが120名(61.2%), 服薬なしが69名(35.2%), その他が2名(1.0%), 未記入が5名(2.6%)であった。

3. 3 支援技法

最も多く実践されていた支援技法は「ソーシャルスキルトレーニング」147名(75.0%)であり, 多くの対象児に用いられていた。「カウンセリング(話をよく聞いてあげる活動)」、「自分の感情に気付く練習」、「感情をコントロールする練習」も半数を超えており, 多く行われていた。その他に, 「他者の気持ちを理解する練習」、「ロール

プレイング」、「遊戯療法(遊びを中心とした活動)」、「アサーショントレーニング(上手に自分の気持ちを主張する練習)」もそれぞれ30%以上挙げられており, 通級指導教室では様々な支援が行われていることがうかがわれた。また, 大半の対象児に対して複数の支援技法が組み合わせられて用いられていた。

3. 4 感情のコントロールが上手になった要因

支援技法以外に対象児の感情のコントロールが上手になったと考えられる要因について, 174名から回答が得られた。KJ法によって分析を行った結果(表2), 『学校』, 『家庭』, 『学校と家庭の連携』, 『児童自身の変化』, 『その他』の5つのカテゴリと『特になし・わからない』に

表3 通常学級での変化 (N=186)

カテゴリ	サブカテゴリ	具体例	件数 (%)
授業・集団活動・学校行事等への参加		・授業に参加できることが増えた ・学校行事に参加できるようになった 等	46 (24.7)
行動コントロールの向上 42 (22.6)	教室飛び出し、離席の減少 攻撃行動の減少 その他	・教室から飛び出すことが少なくなった ・離席をすることがなくなった 等 ・暴言、暴力が減った ・自傷行為が減った 等	24 (12.9) 7 (3.8) 11 (5.9)
感情コントロールの向上		・クールダウンの時間が短くなった ・気持ちの切り替えが早くなった 等	38 (20.4)
周囲との良好な関係の構築		・他児と仲良く遊べるようになった ・友達ができた・友達が増えた 等	36 (19.4)
スキルの上達 35 (18.8)	言語表現の上達 対処法の実践	・自分の気持ちを伝えられるようになった ・援助要請できるようになった 等 ・ひどくなる前に対処できるようになった	27 (14.5) 8 (4.3)
トラブルの減少		・トラブルが減った・落ち着いた	28 (15.1)
周囲の理解浸透		・周りに受け入れてもらえるようになった ・担任や友達が認めてくれるようになった	17 (9.1)
積極性・意欲の向上		・学習に意欲的になった 等	15 (8.1)
自己理解・自己評価の向上		・自分の言動を振り返れるようになった ・自信がもてるようになった 等	11 (5.9)
その他		・周りの様子に気付くようになった ・表情が豊かになってきた 等	16 (8.6)
特になし			2 (1.1)

分類された。また、『学校』のカテゴリは、『担任（関わり含めて）の変化』を始めとした4つのサブカテゴリに、『家庭』は『母親の本児理解』を始めとした5つのサブカテゴリに、『児童自身の変化』は『自己理解と自己肯定感の向上』、『自己意識・コントロールの向上』の2つのサブカテゴリに、『その他』は『医療機関との連携』、『通級指導教室等の活用』の2つのサブカテゴリにそれぞれ分類された。カテゴリとサブカテゴリのなかで最も記述が多かったのは『担任（関わり含めて）の変化』83件（47.7%）であり、具体的には「学年が上がって担任が替わった」、「クラスのルールを明確に示してくれるようになった」、「良いところをほめてくれた」等が多く挙げられていた。次に『母親の対応の変化』が39件（22.4%）と多くなり、特に「強く叱責せず、話を聞いてくれるようになった」、「たくさんほめてくれるようになった」、「声掛けを工夫してくれるようになった」等が多く挙げられていた。対象児に対する支援だけでなく、学校や家庭などの周囲の変化が感情コントロールに良い影響を及ぼしていることがうかがわれた。

3. 5 通常学級での対象児の姿（変化）

感情のコントロールが上手になったことによって生じ

た対象児の通常学級での変化について、自由記述で回答を求め、186名から回答が得られた。KJ法によって分析を行った結果（表3）、『授業・集団活動・学校行事等への参加』、『行動コントロールの向上』、『感情コントロールの向上』、『周囲との良好な関係の構築』、『スキルの上達』、『トラブルの減少』、『周囲の理解浸透』、『積極性・意欲の向上』、『自己理解・自己評価の向上』、『その他』の10のカテゴリと『特になし』に分類された。なお、『行動コントロールの向上』はさらに『教室飛び出し、離席の減少』、『攻撃行動の減少』、『その他』の3つのサブカテゴリに、『スキルの上達』は『言語表現の上達』、『対処法の実践』の2つのサブカテゴリにそれぞれ分類された。カテゴリの中で最も記述が多かったのが『授業・集団活動・学校行事等への参加』46件（24.7%）であり、「授業に参加できることが増えた」、「学習に落ち着いて取り組める時間が増えた」等が多く挙げられていた。続いて、『行動コントロールの向上』が3つのサブカテゴリを合わせて42件（22.6%）と多くなり、「教室を飛び出すことが少なくなった」、「暴力が少なくなった」等のほかに、「自傷行為が減った」などが挙げられていた。

4. 考察

感情のコントロールが上手になった児童は、学年や診断名、服薬の有無などについて目立った特徴は見られなかった。一方、個に適した指導や環境調整を行うことで、多くの児童が感情のコントロールが上手になるという可能性が伺われた。対象児に行った支援技法として多く実践されていたのは「ソーシャルスキルトレーニング」や「カウンセリング（話をよく聞いてあげる活動）」、「自分の感情に気付く練習」であり、対象児自身が内面の感情に気づき、それらをじっくり聞いてもらうことや湧き上がってきた感情を適切に表現する練習が多く行われていたことが示された。先行研究でも、通級指導教室において対人的・社会的スキルの向上を図るためのソーシャルスキルトレーニングを取り入れた活動が多く行われていることが示されており（菊池ら, 2014）⁸⁾、一致した結果となっている。また、通級での特別な支援技法以外の学校・家庭の環境調整や関わり方の工夫などの要因も、感情コントロールが上手になったことに大きく関与していることがうかがわれる。今回の調査から『担任（関わり方含む）の変化』は約半数の対象児に影響を及ぼしたことが示された。菊池ら（2014）が、通級での指導は般化されにくいという問題点を指摘していることを踏まえると、感情コントロールが困難な児童に対して、通級での指導だけでなく、児童に関わる教員間の情報共有や連携による通常学級の環境を適切に整えることの重要性が明らかになった。加えて、家庭における親子関係も感情コントロールの向上に影響を与えることが推測された。神山ら（2016）⁹⁾ は、小学校と中学校の通級指導教室を利用している発達障害児の保護者にペアレント・トレーニングを行い、対象児の標的行動の改善や保護者の不安得点の減少が見られたことを報告している。このことから、保護者に対して、子ども理解の促進や適切な対応の教示などの系統的なペアレント・トレーニングといった直接アプローチする取り組みも今後必要とされるであろう。

本結果から、感情コントロールが上手になったことによって、対象児の授業や学校行事等への参加が進み、周囲と良好な関係を築けるようになった姿や、学校生活に適応し楽しめるようになった変化が示された。児童の感情コントロールの困難さや特性に応じて、通級指導教室のみならず通常学級や家庭という各々の場で、専門的な支援技法の導入、環境調整と工夫した関わり、適切な親子関係と子育てを実践することが感情コントロールを上手にすることに影響を与えていた。また、児童の内面の理解（傾聴など）と適切な感情表現を具体的に教示する

（ソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニング等）という内外二側面へのアプローチをすることが有効であるとされた。

文献

- 1) 文部科学省：通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果，初等中等教育局特別支援教育課，2012.
- 2) 文部科学省：平成29年度通級による指導実施状況調査結果について（別紙2），初等中等教育局特別支援教育課，2018.
- 3) 司城紀代美：通常学級において「特別な支援が必要」とされる児童と他児とのかかわり—ヴィゴツキー障害学の視点から—，特殊教育学研究，50（2），171-180，2012.
- 4) 武蔵博文・西本公平：発達障害児を対象とし対人トラブルの対処に焦点を当てた小集団SST，香川大学教育実践総合研究，27，77-90，2013.
- 5) 菅野希倭・橋本創一：発達障害や行動・情緒的な支援ニーズのある児童の対人トラブルと背景要因に関する調査研究，東京学芸大学紀要総合教育科学系，67（2），311-317，2016.
- 6) 都築繁幸・長田洋一：ASDの対人関係の向上を目指した小学校の実践研究の動向に関する一考察，障害者教育・福祉学研究，12，131-143，2016.
- 7) 菅野希倭・橋本創一：発達障害児のコミュニケーション・対人トラブルに関する支援研究の動向—行動上の問題，授業妨害，不登校，いじめ・からかい—，発達障害支援システム学研究，14（1），35-42，2015.
- 8) 菊池哲平・伊津野史・江川めぐみ・林田亜砂美：発達障害児のためのグループ・プレイ・セラピーの取組（1）～大学と情緒障害通級指導教室の連携～，熊本大学教育実践研究，31，137-146，2014.
- 9) 神山努・澤田智子・岸明宏：通級を利用する発達障害児の保護者に対するペアレント・トレーニング—全5回のプログラムの効果—，LD研究，25（4），476-488，2016.